

# 高山2号墳Ⅱ

# 中良塚古墳

—小集落地区改良事業に伴う発掘調査報告—

1994年3月

(奈良県北葛城郡)

河合町教育委員会

高山 2 号 墳 II

中 良 塚 古 墳

—小集落地区改良事業に伴う発掘調査報告—

## 例 言

1. 本書は1993（平成5）年度に河合町小集落地区改良事務所が実施した小集落地区改良事業の事前調査として、河合町教育委員会が実施した高山2号墳・中良塚古墳の国史跡指定地に隣接する穴闇 217番地、西穴闇29・30-1番地の発掘調査の報告書である。
2. 現地調査は、1993年9月16日に開始し、1994年1月13日をもって終了した。
3. 調査組織は下記のとおりである。

事業主体 河合町

調査主体 河合町教育委員会

調査担当者 河合町教育委員会事務局 社会教育課 技師・吉村公男

調査参加者 岩田英之、中西靖男、中原光男、水田博三、小林美佐子、中山采子

調査事務局 河合町小集落地区改良事務所

同和対策部長・藤岡和成 課長・増田昌敬 補佐・梅本英則

係長・木村光弘 主事・村田均、東浦和樹、竹林朋久美 技師・堀内伸浩

河合町教育委員会事務局 社会教育課

教育長・吉田守 教育次長・藤川一昭 課長・西野宗次 係長・吉田昌泰

主事・山口登美子、木戸正人、五島晃

4. 本書を作製するにあたり下記の諸機関ならびに諸氏のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

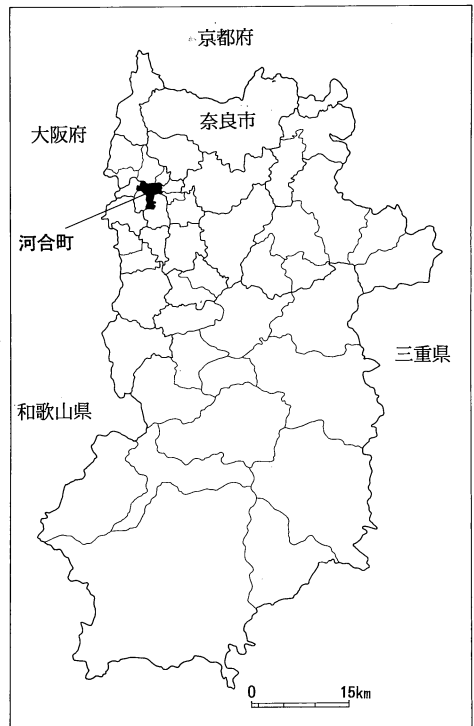
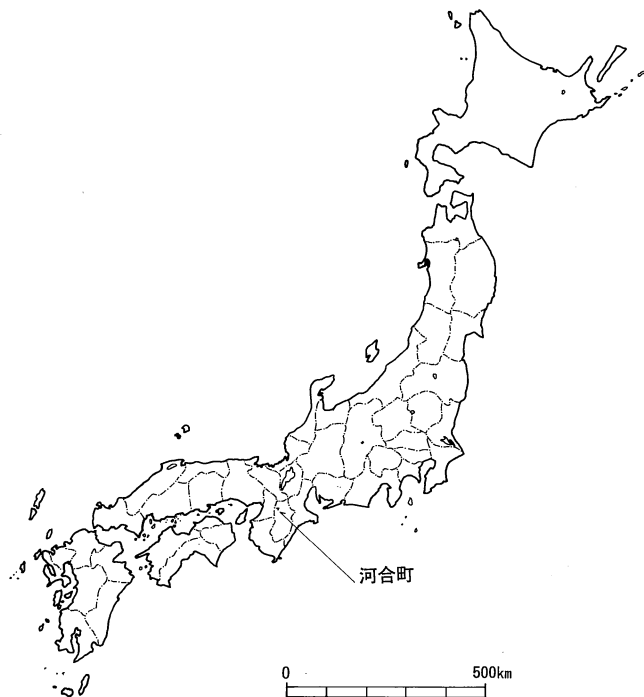
河上邦彦、辰巳和弘、前園実知雄、木場幸弘、前坂尚志、富田眞二、奥田尚、

宮原晋一、前澤郁浩、坂靖、木下亘（敬称略、順不同）

5. 写真は航空写真をワールド航測コンサルタント(株)が撮影し、遺構及び遺物写真は吉村が撮影した。
6. 遺物の整理及び本書の作製は吉村、中山、小林、及び末廣春枝があたった。
7. 図1は平成4年修正版河合町全図(1:10,000)、図2は『馬見丘陵の古墳－佐味田宝塚・新山古墳とその周辺』（河合町・河合町教育委員会発行、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編集、1988年）の分布図をもとに作製した。
8. 本書の執筆・編集は吉村がおこない、奥田尚氏より玉稿を賜った。

# 本文目次

1. はじめに	
(1)調査の契機と経過	1
(2)位置と歴史的環境	1
2. 高山2号墳の調査	
(1)第1次調査の概要	5
(2)遺構	6
(3)遺物	9
(4)小結	17
3. 中良塚古墳の調査	
(1)遺構	20
(2)遺物	24
(3)小結	28
4. 結語	28
付載 中良塚古墳外堤の葺石（奥田尚）	29



河合町の位置

## 図 目 次

図1	高山2号墳・中良塚古墳とその周辺の遺跡分布図	2
図2	馬見丘陵の古墳分布図	3
図3	高山2号墳トレンチ平面図及び土層断面図	7～8
図4	高山2号墳出土遺物1	13
図5	高山2号墳出土遺物2	14
図6	高山2号墳出土遺物3	15
図7	高山2号墳出土遺物4	16
図8	高山2号墳出土遺物5	17
図9	中良塚古墳トレンチ平面図及び土層断面図	21～22
図10	中良塚古墳第2トレンチ拡張区葺石平面図及び立面図	23
図11	中良塚古墳出土遺物1	26
図12	中良塚古墳出土遺物2	27
図13	中良塚古墳周濠葺石の石種	30
付図	高山2号墳・高山3号墳・中良塚古墳地形図	

## 写真目次

写真1	中良塚古墳・高山2号墳・高山3号墳航空写真	4
写真2	高山2号墳調査前(北西から)	6
写真3	高山2号墳第1トレンチ(西から)	6
写真4	高山2号墳第2トレンチ(北西から)	9
写真5	高山2号墳出土遺物1	10
写真6	高山2号墳出土遺物2(人物埴輪)	11
写真7	高山2号墳出土遺物3	18
写真8	高山2号墳出土遺物4	19
写真9	中良塚古墳トレンチと墳丘(西から)	20
写真10	中良塚古墳トレンチ全景・手前が第1トレンチ(南から)	20
写真11	中良塚古墳第2トレンチ拡張区葺石検出状況	23
写真12	中良塚古墳出土遺物	27

## 表 目 次

表1	高山2号墳出土埴輪観察表	12
表2	中良塚古墳出土埴輪観察表	25
表3	葺石の礫種と礫径	29
表4	葺石の礫種と礫形	30

## 1. はじめに

### (1)調査の契機と経過

今回の調査は、平成5年度小集落地区改良事業（宅地造成）に伴う事前調査として実施した。調査を実施した穴闇 217番地及び西穴闇29・30-1番地は国指定史跡である大塚山古墳群のうち中良塚古墳・高山2号墳の隣接地である。穴闇 217番地は中良塚古墳（指定名称・高山塚1号古墳）の史跡指定地（穴闇 219-1番地）の西側隣接地であり、中良塚古墳に係わる遺構の有無と大型前方後円墳の周辺によくみられる円筒埴輪棺等の確認を主眼として調査を行った。また、西穴闇29・30-1番地は高山2号墳（指定名称・高山塚2号古墳）の史跡指定地（穴闇 215番地）西側及び北側に隣接しており、1987年度に史跡指定地の東側隣接地（穴闇 214-1、214-4 番地）の発掘調査により検出された周濠の存在が予想されたため、周濠の範囲を確認する目的で調査を行った。

調査は1993年9月16日より開始し、1994年1月13日で終了した。この間、中良塚古墳の周濠部分の葺石が予想外に良好な状態で検出されたため、教育委員会と小集落地区改良事務所の間で遺構保存のための協議を行い、設計を変更したため、その調整に時間を費やすこととなり、現地調査の期間が長くなった。

調査の結果に基づき、高山2号墳では周濠の範囲を道路面に標示することとし、かつ、現状の墳丘で崩壊の著しい部分については盛土等により保護を図ることとした。中良塚古墳では擁壁を西側にずらして遺構の破壊を避けると共に、現状の周濠の景観保全に努めた。

### (2)位置と歴史的環境

中良塚古墳・高山2号墳の所在する奈良県北葛城郡河合町は奈良県の北西部を占める奈良盆地の西部に位置し、大和川へ奈良盆地の多くの河川が合流する地点の南西側である。大和川を挟んで北側には法隆寺や藤ノ木古墳で有名な生駒郡斑鳩町があり、その他、生駒郡安堵町、磯城郡川西町・三宅町、北葛城郡広陵町・上牧町・王寺町と接している。

奈良盆地西縁に横たわる南北7km・東西3km・平野部との比高約30mの低い丘陵は「馬見丘陵」と呼ばれるが、この馬見丘陵の東側斜面を中心に大型古墳が多く分布しており、一般に「馬見古墳群」と称され、奈良盆地東部の大和・柳本古墳群、盆地北部の佐紀盾列古墳群と並ぶ大和の三大古墳群の一つとして著名である。通常、「馬見古墳群」はその分布状況から、大和高田市の築山古墳を中核とする「南群」、広陵町の巢山古墳を中核とする「中央群」、河合町の川合大塚山古墳を中核とする「北群」の3つのグループに分けられ、中良塚古墳・高山2号墳は「北群」に含まれる。

いわゆる「北群」は、4世紀中頃から古墳の築造が開始される「南群」「中央群」に比べ、群形成の開始が「馬見古墳群」の中では最も遅く、5世紀後半に川合大塚山古墳が築造され、6世紀前半の川合城山古墳の築造をもって群形成が終了するという非常に古墳築造期間が短いという特徴を

有している。また、「南群」「中央群」の古墳が同時期の和歌山における古墳の中では必ずしも傑出した存在ではないのに対し、「北群」の川合大塚山古墳・川合城山古墳は同時期の和歌山における最大級の古墳である点も「馬見古墳群」を考える上で重要な点である。そして、「南群」「中央群」が丘陵上または東側斜面に築造されているのに対し、「北群」は馬見丘陵の裾野に広がる平地に築造されており、和歌山では最も低い地点に存在する。このような立地からは同様の立地条件にある川西町島ノ山古墳との関わりも注目されている。さらには、大塚山古墳から 1.2km西側の独立丘陵上には、築造時期は不明であるが、直径約40mの大型円墳であるフジ山古墳があり、「北群」との関係が注目される。

古墳時代以降の遺跡としては穴闇に所在する長林寺がある。長林寺は聖徳太子の建立という伝承を持つ寺院であり、古くから金堂基壇や塔心礎の存在が知られ、法起寺式伽藍配置の寺院であるとされてきた。1987・88年度に発掘調査が実施され、塔を除く主要伽藍が確認され、7世紀前半には何らかの建物が存在した可能性はあるものの、七堂伽藍が整った寺院となるのは7世紀後半代であると考えられている。金堂基壇は瓦積基壇で部分的に丸瓦を立てて積んでいる。馬見丘陵の周辺の寺院跡としては、北葛城郡広陵町の百濟寺や同郡王寺町の西安寺・片岡王寺・片岡尼寺が知られる。いずれも大規模な発掘調査は実施されておらず、詳細が不明であるため、長林寺はこの地域の古代寺院の状況を知る上で重要な資料である。

また、大塚山古墳群の東側の河川合流点には廣瀬神社が鎮座している。廣瀬神社は『日本書紀』天武天皇条に廣瀬大忌神として廣瀬の川曲に祭られたとあり、和歌山川右岸の竜田の風神と並んで廣瀬の水神として広く崇敬を受けてきた。廣瀬神社の社伝には崇神天皇期の創建と伝えているが、恐らく7世紀以前に神社の母体となる信仰があったものと考えられ、大塚山古墳群との関わりも考慮しなければならないだろう。

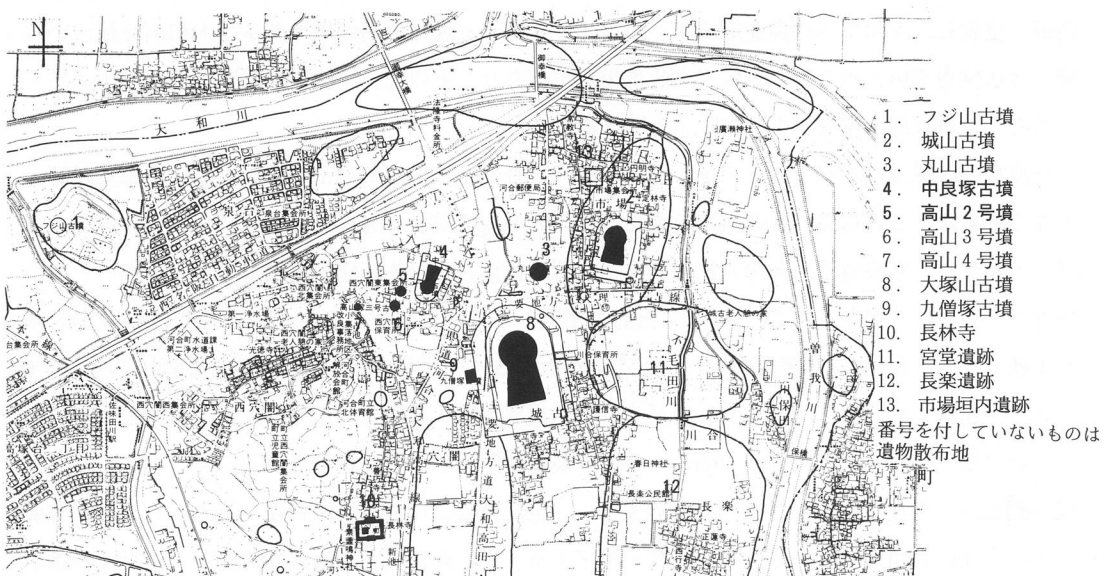


図1 高山2号墳・中良塚古墳とその周辺の遺跡分布図(1:20,000)

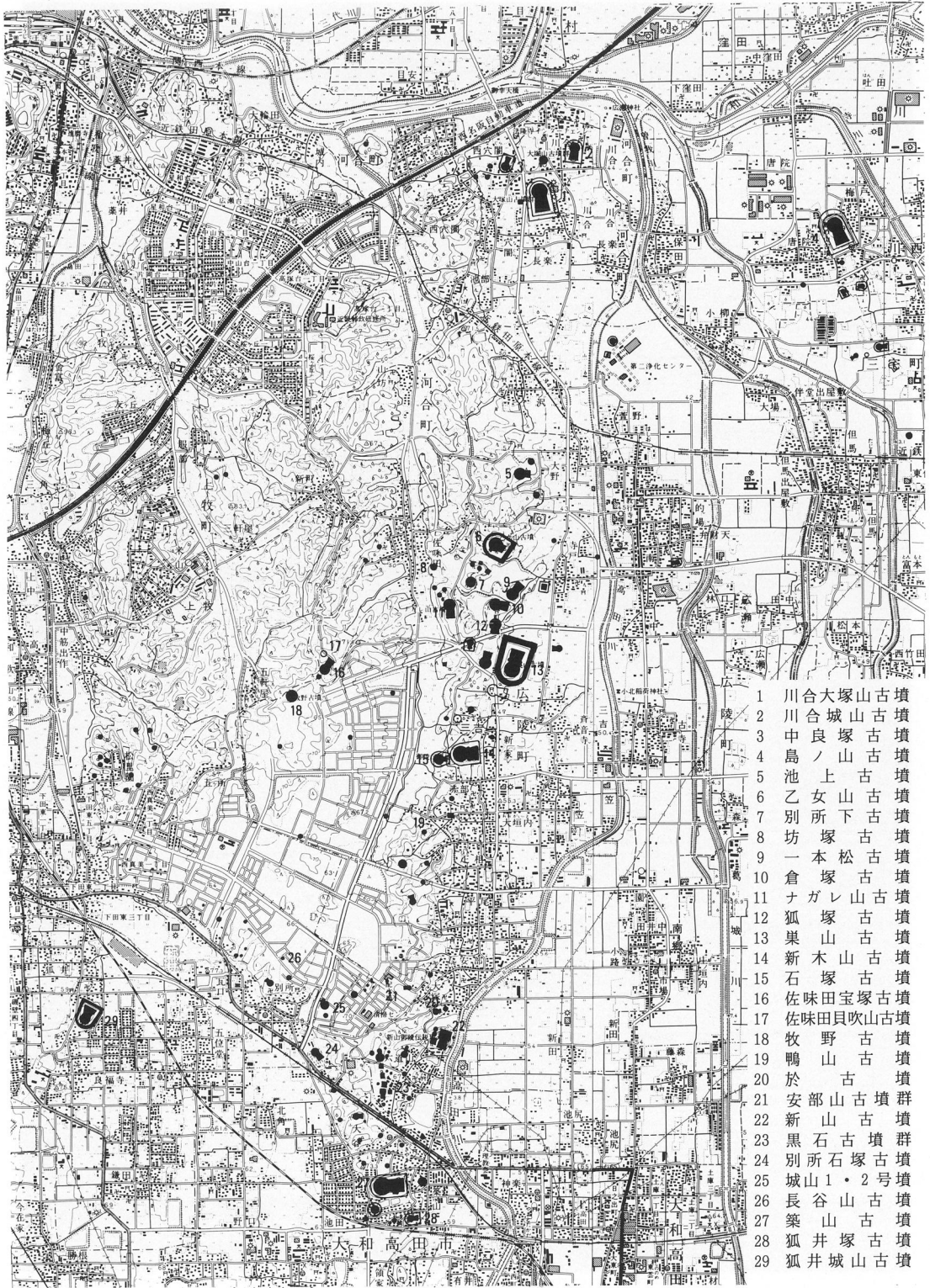


図2 馬見丘陵の古墳分布図





写真1 中良塚古墳・高山2号墳・高山3号墳航空写真（左が北）

## 2. 高山2号墳の調査

### (1)第1次調査の概要

高山2号墳の発掘調査は1987年6月22日より6月25日までと今回の調査の2回にわたる。このため今回の調査を第2次調査とし、1987年の調査を第1次調査とする。第1次調査は西穴闇東集会所建設の事前調査として河合町教育委員会が調査主体となり、奈良県立橿原考古学研究所が調査を担当した。調査は高山2号墳の墳丘及び周濠の範囲と中良塚古墳の外堤の有無の確認を主眼とし、2本のトレンチを設定し実施している。尚、中良塚古墳については、この時の調査では顕著な遺構は検出されておらず、報告も高山2号墳の範囲確認として行われているため、今回の調査を第1次調査と位置づけ、今後、中良塚古墳及びその周辺地で発掘調査を実施する場合には順次、次数を付すこととする。

第1次調査前の高山2号墳は東西16m、南北18m、高さ2.5mを測り、東側は比較的良好な状態であったが西側は大きく削られ崖状を呈していた。また、墳丘には一面に笹等が繁茂した状態であった。調査対象地は高山2号墳の国史跡指定地の東側と北側であるため、付図の'87-1tr.・'87-2tr.の2ヶ所にトレンチを設定している。

第1トレンチは、高山2号墳の周濠と中良塚古墳の外堤の確認のためL字形に設定された全長62m、幅3mのトレンチである。高山2号墳の現状の墳丘裾から北へ4.5mの地点から約5.8mの幅で灰褐色砂質粘土層が約20cmの厚みで堆積しており、この層中に埴輪の破片が多く含まれていることからこの部分が周濠にあたると考えられる。また、周濠底に拳大の円礫が堆積しており、葦石の流れ込んだものと思われる。

また、中良塚古墳の西側部分では盛土・耕作土・床土を除去するとすぐに黄灰色粘質土層に達し、遺構は検出されていない。

第2トレンチは、高山2号墳の東側に設定された長さ11m、幅3mのトレンチである。層序は第1トレンチと同様である。周濠内堆積土は、現状の墳丘裾から東へ約6mの位置からみられた。

この第1次調査では墳丘の北と東で周濠が確認され、高山2号墳は直径約28mの円墳で、幅約6mの周濠を有する古墳であると推定された。

出土遺物は円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪・須恵器である。埴輪は全て無黒斑で窖窯焼成で、須恵質のものもみられる。調整はハケ調整を行うものとナデのみのものの2種がある。ハケ調整を行うものの中には所謂B種ヨコハケが含まれている。以上の特徴からIV期の埴輪と位置づけられる。また、埴輪には線刻のあるものがあり、線刻は複数に分類可能で、調整技法の相違に対応しているようである。

※奈良県立橿原考古学研究所編『河合町文化財調査報告第2集 史跡乙女山古墳 付高山2号墳 一範囲確認調査報告一』河合町教育委員会 1988年

## (2)遺構

第2次調査のトレンチの位置については付図の'93-1tr.・'93-2tr.である。第2次調査の調査地は高山2号墳の国史跡指定地西側であるため、第1次調査によって推定復原された墳丘中心を挟んで、第2トレンチに対応する位置(墳丘の西側)に第1トレンチを設定した。また、事業対象地が北に長く伸びた土地であるため、第1トレンチと第1次調査第1トレンチとの間(墳丘の北西側)に、墳丘中心から放射状に第2トレンチを設定し、古墳の範囲をより正確に把握することに努めた。さらに、高山3号墳との位置関係と築造時期の前後関係を把握するために、南側の道路に近い位置にトレンチを設定しようとしたが、諸般の事情により叶わなかった。

第1トレンチは東西方向に長さ11m、幅3mに設定した。調査地は全域にわたって厚さ20~60cmの盛土(1層)がなされていた。盛土の下は旧水田面で耕作土(2層)・床土(暗灰色土・3層)があり、ほぼ水平に広がっている。トレンチの東端より7.60m西側から約3.60mの幅で埴輪破片や葺石材が地山(4層)直上の黄灰色粘質土(5層)内に含まれ、また、この部分で20cm程度地山が下がっており、この部分が周濠と考えられる。遺物が多量に含まれる黄灰色粘質土(5層)は、中良塚古墳でのトレンチの土層にも見られる墳丘部分の地山が開墾により攪乱されたものと考えられ、周濠部分に均一に堆積した状況では見られなかった。

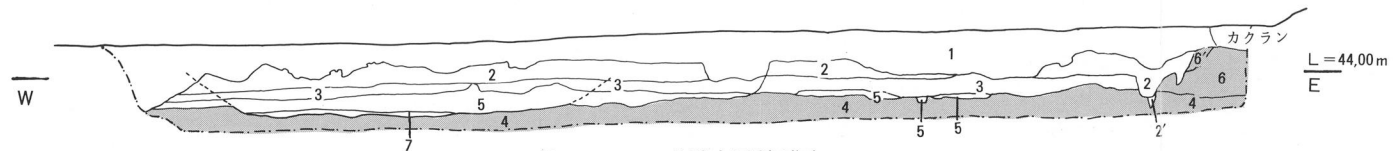
第2トレンチは南北方向に長さ25.2m、幅2mに設定した。トレンチの南端より約6m北側から約3.2mの幅で埴輪破片や葺石材が地山(4層)直上に散布していた。このため、遺物の散布範囲の拡がりを確認するため西側に長さ2.5m、幅6.5mの範囲を拡張して調査した。遺物は第1トレンチと同じく黄灰色粘質土(5層)内に含まれているが、後世の攪乱により一定の幅と厚みをもって



写真2 高山2号墳調査前(北西から)

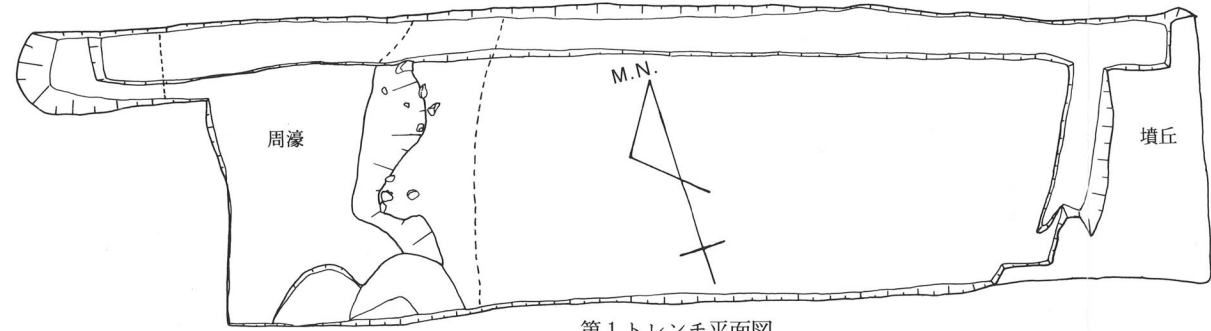


写真3 高山2号墳第1トレンチ(西から)

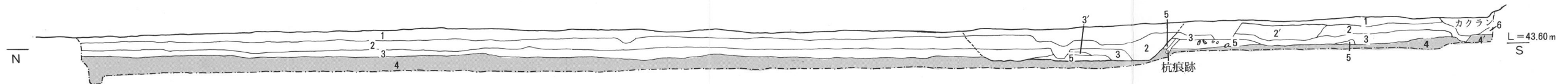


第1トレンチ北壁土層断面図

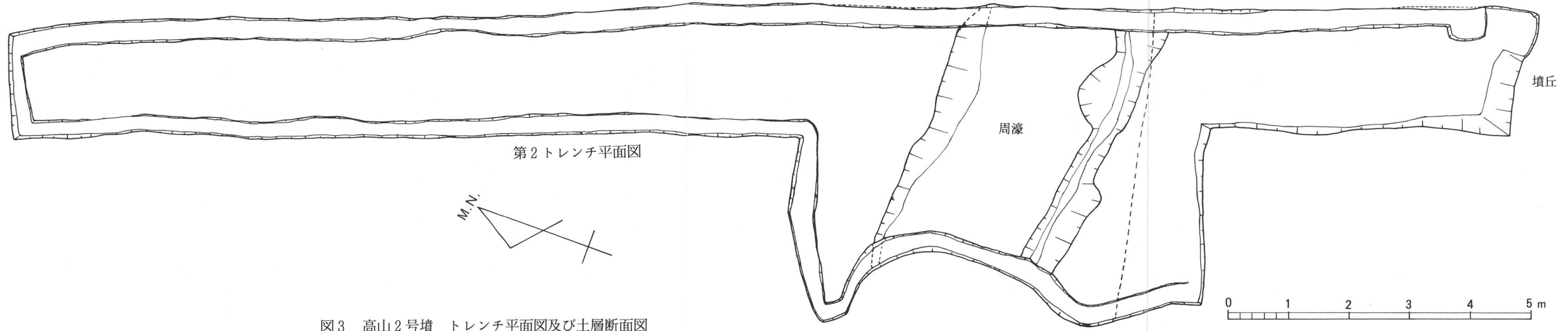
- 1 盛土
- 2 黒色土 (耕作土)
- 2' 1と2が混じる・攪乱
- 3 暗灰色土
- 3' 3と5が混じる
- 4 灰褐色砂 (地山)
- 4' やや青みがかかる (地山)
- 5 黄灰色粘質土 (遺物が多量に混じる)
- 6 明黄色粘土 (地山)
- 7 暗灰色砂質土



第1トレンチ平面図



第2トレンチ東壁土層断面図



第2トレンチ平面図

図3 高山2号墳 トレンチ平面図及び土層断面図



堆積しているという状態ではない。トレンチの南端より約6m北側部分で、約20cmの落ちがあり当初はこれを周濠の落ちと考えたが、土層の観察から水田耕作に伴う溝状の遺構と考えるのが適当と思われる。トレンチの西側拡張部分では、この溝の約1.2m南側から北向きに地山が徐々に傾斜しており、図3のトレンチ平面図に破線で示したとおり、これが本来の周濠の範囲と考えられる。埴輪や須恵器の破片も拡張部分の南端付近には散布していない。



写真4 高山2号墳第2トレンチ（北西から）

以上の2本のトレンチの状況から、周濠部分は後世の掘削により削平され、明瞭な状態では検出できなかったが、周濠底部の高さが標高43.50mであるのに対し、掘削

面の高さは標高43.70mで約20cmの僅かな地山の窪みが認められ、かつ、埴輪の破片が集中する部分が限定された帯状の範囲であることから周濠の痕跡とみるのが妥当である。その結果、本来の墳丘はさらに規模が大きくなり直径35m程度に復元できる。

しかしながら、先に述べたように墳丘の南西側の調査ができず、南側の状況は確認できていない。また、南側に隣接する高山3号墳との関わりも確認できなかった。高山3号墳は1991年度の発掘調査により、直径約30mの円墳として復元したが、道路部分で2つの古墳の周濠が接することとなる。高山2号墳の2度の調査からは周濠が正円形に復元されたわけではなく、2基の古墳を併せた墳形や、個別に帆立貝形古墳としての復元も可能である。

### (3)遺物

出土遺物としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪の他、人物埴輪の腕、動物埴輪の脚の一部、須恵器がある。いずれも開墾による破砕が著しく完形品ではない。表面が磨耗しているものが多く、図化できうる資料のみを掲載した。図4・5は第1トレンチから出土した資料であり、図6・7は第2トレンチから出土した資料である。図8の形象埴輪のうち55・57が第1トレンチ出土、54・56は第2トレンチ出土の資料である。

#### 円筒埴輪（図4～7：1～11、18～28、30～53）

今回の発掘調査により出土した埴輪破片のうち、円筒埴輪の破片が大半を占める。ただし、破片資料であるため朝顔形埴輪や形象埴輪の円筒部分との区別はできないので、便宜的に円筒埴輪とし

て取り扱っている。  
 例えば、図7-46  
 は外面に赤色顔料  
 を塗布しており、  
 円筒埴輪ではない  
 可能性が高いが、  
 上部に接続する資  
 料がないので『円  
 筒埴輪』と呼称し  
 ておく。

1～8、26～28、  
 38、41～45は口縁  
 部の破片。3は今



写真5 高山2号埴輪出土遺物1

回の調査で出土した埴輪のうち、最もよく接合できた資料で、  
 口縁部と凸帯2条分の復元が可能であった。図上復元で口径  
 は27.1cmで高さは27.0cmである。この他に口径を図上復元で  
 きたものは、1・2・7・8・26～28であり、1は33.2cm、  
 2は32.4cm、7は25.5cm、8は24.6cm、26は27.5cm、27は27.1  
 cm、28は25.8cmである。口径からは33cm前後の大型のもの、  
 26cm前後の小型のものという2つがあるが、それぞれに調整  
 技法や焼成の状態などが対応するわけではない。ただし、資  
 料的制約があり、一概には言えない。

口縁部の形態は、ほとんど外反せず直線的なもの(1・3・6・7・8・26・27・28・38・41・  
 42・43・44・45)、逆L字状に屈曲するもの(4・5)、端部外側に帯状の低い凸帯を巡らせるもの  
 (2)の3つがある。ほとんど外反せず直線的なものも、端面が直線的なもの(1・3・6・27・  
 28・38・41・42・43・44・45)と丸みを帯びるもの(7・8・26)があり、第1次調査で得られた  
 資料と同様である。尚、2については、内外面共に赤色顔料を塗布しており、他の円筒埴輪とは異  
 なる用途も考えられよう。

3の口縁部の長さは10.1cm、上から1条目と2条目の凸帯間の間隔は凸帯中央間で10.5cmである。  
 凸帯間の間隔が判るものは他に9があり、凸帯中央間で11.1cmである。

9～11、18～25、30～31、36～40、46～53は胴部の破片である。凸帯は台形状のものが多いが、  
 M字形もある。凸帯部分はほとんどがナデ調整であるが、31はハケ調整を行っている。また、46及  
 び52は外面に赤色顔料を塗布している。

32～35は底部の破片である。いずれも図上復元を試みている。底部の直径は32が21.4cm、33が18.4cm、34が17.6cm、35が16.0cmである。32は外面をヨコハケ調整し、内面はナデ調整である。33・34・35は外面をタテハケ調整し、33はタテハケのあとナデている。内面調整は33がナナメハケのあとナデているのに対して、34・35はナデのみである。

26・28・36～40には線刻が認められる。26・28・38は口縁部に線刻が施され、36・37・40は凸帯の直上に線刻が施されている。このうち、40は線刻の上にスカシがあり、円形スカシの周りに線刻が施されたものを想定できよう。

今回の調査で出土した資料から、高山2号墳の円筒埴輪の1つの種類は4条凸帯で、口径27cm程度、底径20cm程度、高さ約60cm程度の復元が考えられる。

#### 朝顔形埴輪 (図5・6 : 12～17、29)

12・14・15は口縁部の破片である。このうちで図上復元できた12は、口径30.8cmを測る。12は磨滅が著しく、1次調整などは不明であるが、最終的な調整は内外面ともにナデ調整である。14は凸帯の上下で調整が異なる。外面の凸帯より下はタテハケ、上はヨコハケを施している。内面は、凸帯より下はヨコハケ、上はナナメ方向のナデにより調整している。15は全てナデ調整である。

13・16・17・29は肩部・頸部の破片である。このうちで図上復元できたものは13・29である。13は凸帯部分で直径29.6cmを測る。内外面共にヨコハケ調整を施している。29は頸部で直径17.2cmを測る。肩部の外面でヨコハケが観察されるが、他は不明である。16は表面の磨滅が著しく、調整は不明である。17は外面の凸帯より下はヨコハケ、上はナナメハケで、内面はナデ調整である。

#### 形象埴輪 (図8 : 54～57)

55・57は第1トレンチ出土。54・56は第2トレンチ出土の資料である。

54は人物埴輪の腕の破片と考えられる。外面は暗褐色を呈し、断面・内面は暗茶褐色を呈する。外面は磨滅が著しく、調整等は確認できない。残存長10.5cmを測り、形状は、一方が細く、中空の棒状で、細い側で閉じ合われている。太い側の断面では2ヶ所の粘土の接合痕が観察でき、細い側では中央に長く接合痕が観察される。接合痕から2枚の粘土板を合わせて円筒状にし、先端で閉じ合わせて成形している。そして、直線的に伸ばさず、若干曲げている。細い側では外側に細く薄い粘土紐を巻付けている。この粘土紐は両端部を合わせず、途切れている。このような形状から人物埴輪のなかでも、両腕を前方に伸ばし、肘をやや曲げて、両手で魘などを捧げ持つ巫女形埴輪等の破片と考えられる。また、細い粘土紐は手首に装着された釧や環のようなものを表現していると考えられる。

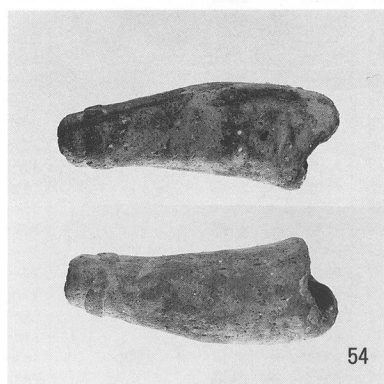


写真6 高山2号墳出土遺物2

56は蓋形埴輪の立飾の破片であろう。断面長方形の棒状で、残存長9.1cmである。長辺の2面は

タテハケ調整を施している。先端は片方の角が斜めに切り落とされている。ハケメの状態から粘土板をハケ調整した後に余分な部分を切り落として整形している。色調は明褐色を呈している。

55は底部で長径9.4cm、短径7.2cmを測る楕円筒形を呈しており、動物形埴輪の脚部と考えられる。色調は乳白色で、きめの細かい胎土である。色調・胎土・焼成は57とよく似ている。

57は形象埴輪の粘土板と粘土板の接合部に補強のために充填したものである。種類は不明である

番号	外面調整	内面調整	種類	部位	スカシ	質	備考
1	ヨコハケ	ヨコハケ	円筒	口縁部		硬質	張付凸帯口縁、赤色顔料塗布
2	ヨコハケ → ヨコナデ	ヨコハケ	円筒	口縁部		軟質	
3	ヨコハケ → 凸帯	エビナデ (口縁部) ヨコハケ	円筒	口縁部 ~ 胴部	円	軟質	
4	ナメハケ	ナメハケ → ヨコナデ	円筒	口縁部		硬質	線刻
5	ナメハケ	エビナデ	円筒	口縁部		軟質	
6	ヨコハケ	ナメハケ	円筒	口縁部		軟質	
7	ヨコハケ	ヨコハケ	円筒	口縁部		硬質	
8	B種ヨコハケ	ヨコハケ	円筒	口縁部		硬質	
9	ヨコハケ → 凸帯	(下部) ヨコハケ (上部) ナメハケ	円筒	胴部	円	硬質	
10	ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ → エビナデ	円筒	胴部	円	硬質	
11	ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ	円筒	胴部	円	硬質	
12	ヨコハケ → ヨコナデ	ヨコナデ	朝顔	口縁部		軟質	
13	ヨコハケ → 凸帯	(下部) ナメハケ → エビナデ (上部) ヨコハケ	朝顔	肩部		須恵質	
14	(下部) ナメハケ → 凸帯 (上部) ヨコハケ → 凸帯	ヨコハケ → ナメハケ → ナメナデ	朝顔	口縁部		軟質	
15	(下部) ヨコハケ → ヨコナデ → 凸帯 (上部) ナメハケ → ヨコナデ → 凸帯	エビナデ	朝顔	口縁部		軟質	
16	ヨコナデ?	ヨコナデ?	朝顔	頸部		軟質	
17	ヨコハケ → 凸帯 → ナメハケ	ヨコハケ → エビナデ	朝顔	肩部		軟質	
18	ヨコハケ → 凸帯	ナメナデ	円筒	胴部		須恵質	
19	B種ヨコハケ? → 凸帯	ナメナデ	円筒	胴部	円	硬質	
20	ナメハケ → B種ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ → エビナデ	円筒	胴部	円	硬質	
21	ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ	円筒	胴部	円	硬質	
22	ナメナデ → 凸帯	ナメナデ	円筒	胴部	円	硬質	
23	ナメハケ → 凸帯	ナメハケ → エビナデ	円筒	胴部	円	硬質	
24	ナメハケ → ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ	円筒	胴部	円	硬質	
25	ナメハケ → ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ	円筒	胴部		硬質	
26	ヨコハケ → ヨコナデ	ヨコナデ	円筒	口縁部		須恵質	線刻
27	ナメハケ → ヨコハケ	ヨコハケ → エビナデ	円筒	口縁部		硬質	
28	ヨコハケ	ヨコハケ → ナメハケ	円筒	口縁部		軟質	線刻
29	ヨコハケ → 凸帯	ヨコナデ	朝顔	頸部		軟質	
30	ヨコハケ → ヨコナデ → 凸帯	エビナデ	円筒	胴部		硬質	
31	B種ヨコハケ → 凸帯	ヨコナデ	円筒	胴部	円	硬質	
32	ヨコハケ	エビナデ	円筒	底部		須恵質	
33	ナメハケ → エビナデ	ナメハケ → エビナデ	円筒	底部		硬質	
34	ナメハケ	エビナデ	円筒	底部		須恵質	
35	ナメハケ	ヨコナデ	円筒	底部		軟質	
36	ヨコハケ → ヨコナデ → 凸帯	ヨコナデ	円筒	口縁?		硬質	線刻
37	ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ → エビナデ	円筒	口縁?		軟質	
38	ナメハケ → ヨコナデ	ナメハケ → ヨコハケ	円筒	口縁部		硬質	線刻
39	ナメハケ	ヨコハケ → ナメハケ	円筒	口縁?		須恵質	
40	ヨコハケ → 凸帯	ヨコナデ	円筒	胴部	円	須恵質	線刻
41	ヨコハケ	ヨコハケ → ナメハケ	円筒	口縁部		軟質	
42	ヨコハケ → ヨコナデ	ヨコハケ → ヨコナデ	円筒	口縁部		硬質	
43	ヨコハケ	ヨコハケ	円筒	口縁部		硬質	
44	ナメハケ	ナメハケ → ヨコハケ	円筒	口縁部		硬質	
45	ヨコハケ → ナメハケ	ナメハケ → ナメハケ	円筒	口縁部		須恵質	
46	ヨコハケ → ヨコナデ → 凸帯	エビナデ	円筒	胴部		須恵質	外面赤色顔料塗布
47	ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ → エビナデ	円筒	胴部		硬質	
48	B種ヨコハケ → 凸帯	エビナデ	円筒	胴部		須恵質	
49	B種ヨコハケ → 凸帯	エビナデ	円筒	胴部		軟質	
50	ヨコハケ → ヨコナデ → 凸帯	エビナデ	円筒	胴部	円	須恵質	
51	ヨコハケ	ヨコハケ	円筒	胴部		硬質	
52	ヨコハケ → 凸帯	ナメハケ → エビナデ	円筒	胴部		硬質	外面赤色顔料塗布
53	ヨコハケ → 凸帯	ヨコハケ → ヨコナデ	円筒	胴部	円	硬質	

表1 高山2号墳出土遺物観察表



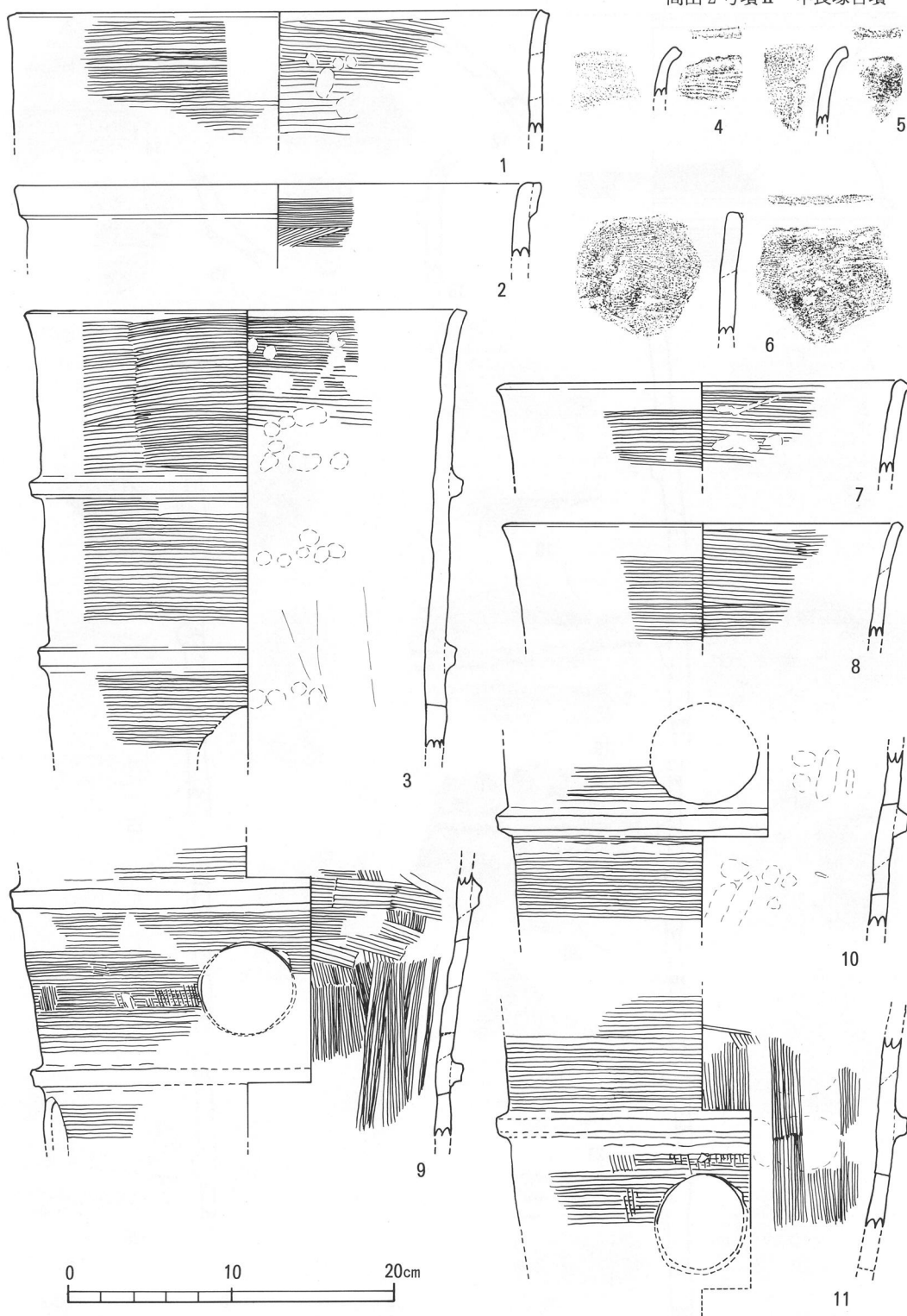


図4 高山2号墳出土遺物1（第1トレンチ出土）

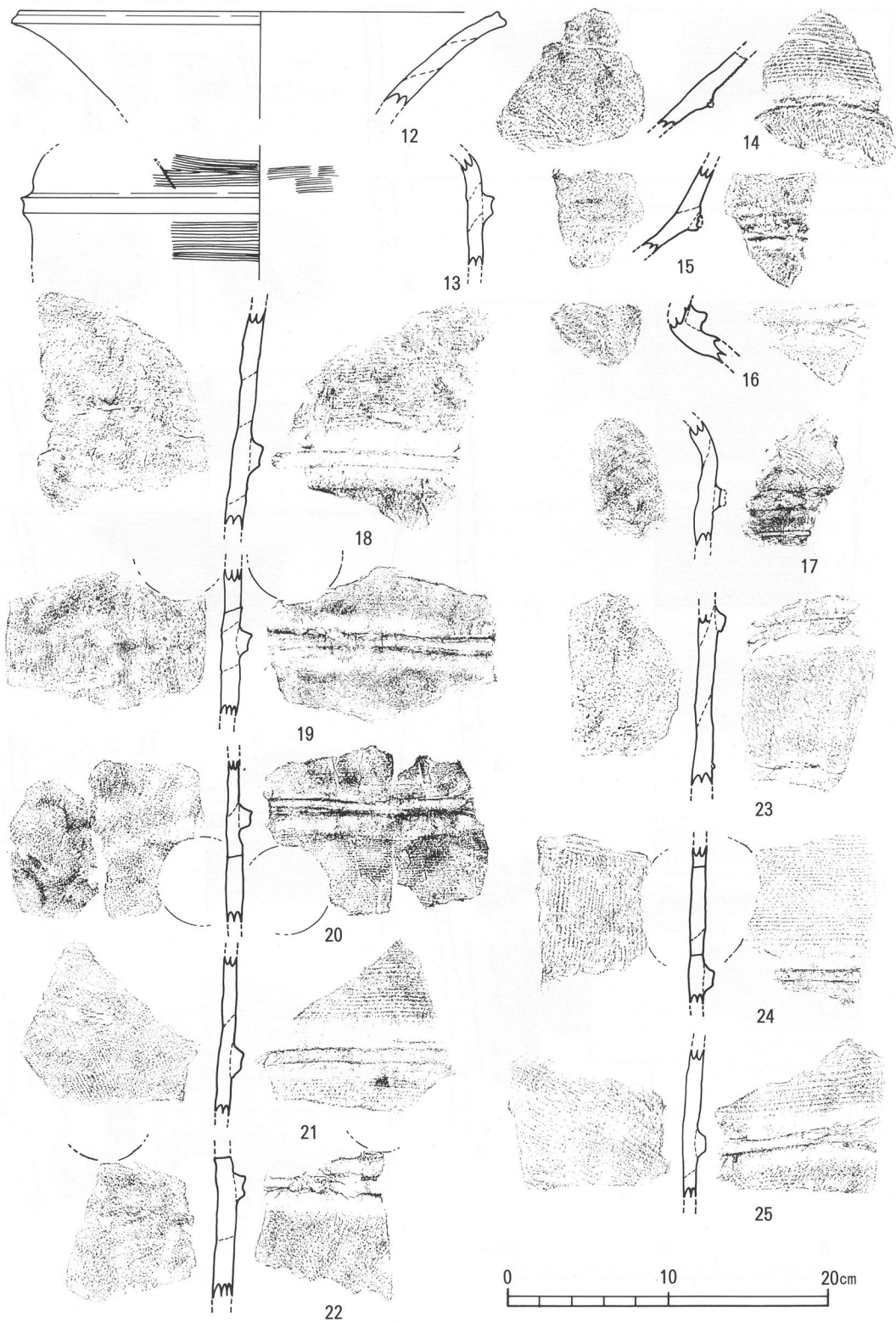


図5 高山2号墳出土遺物2 (第1トレンチ出土)

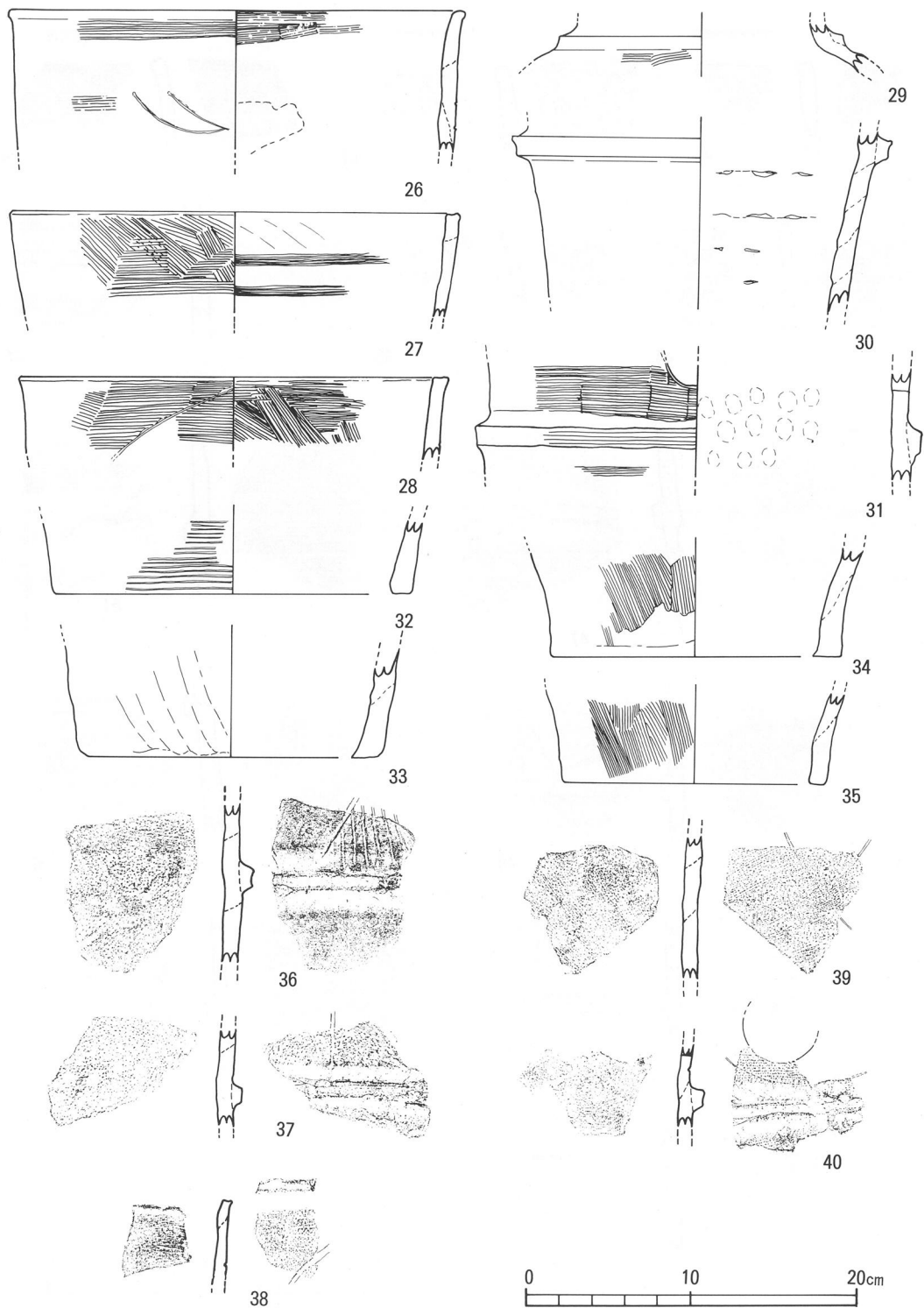


図6 高山2号墳出土遺物3 (第2トレンチ出土)

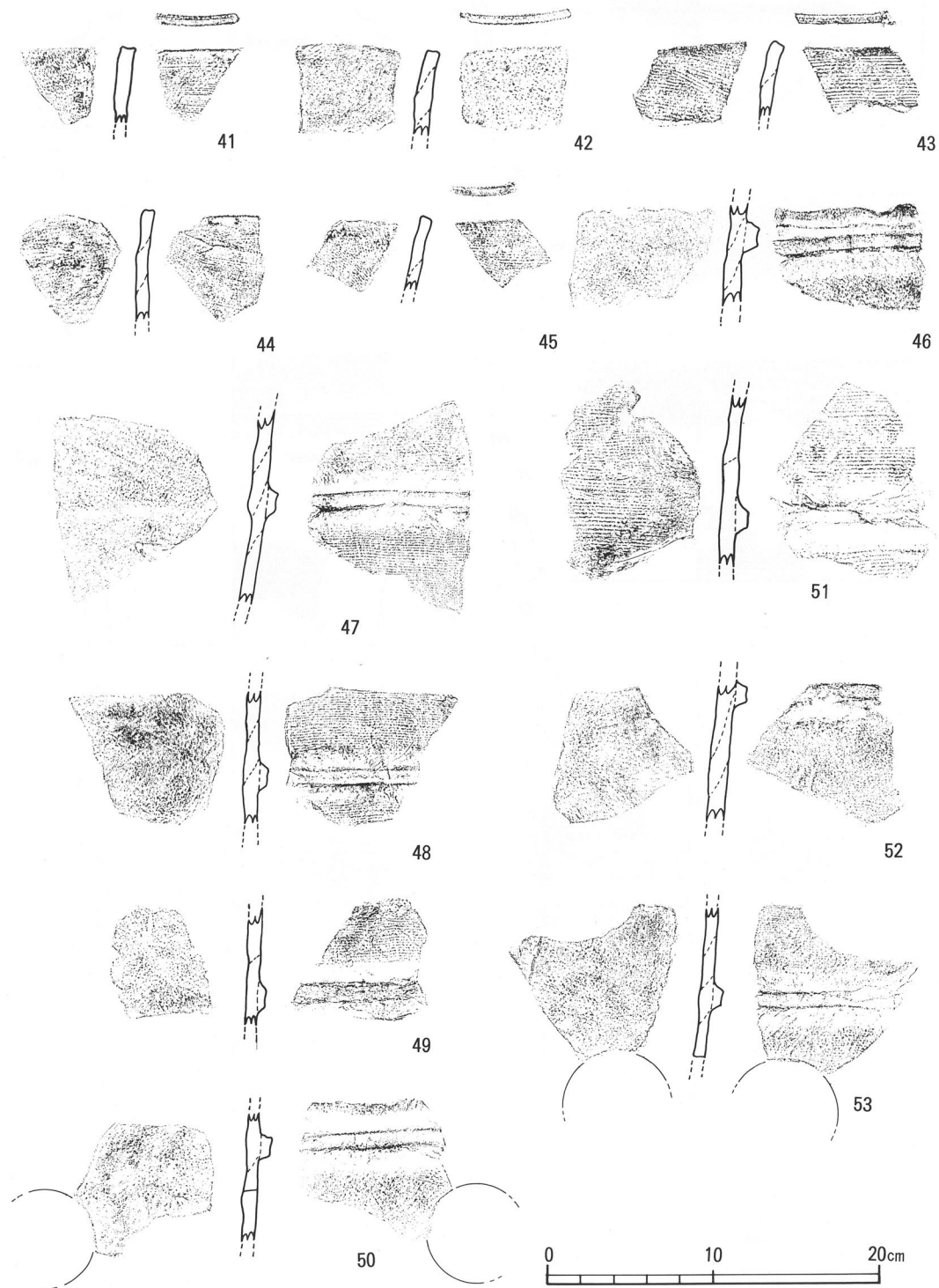


図7 高山2号墳出土遺物4 (第2トレンチ出土)

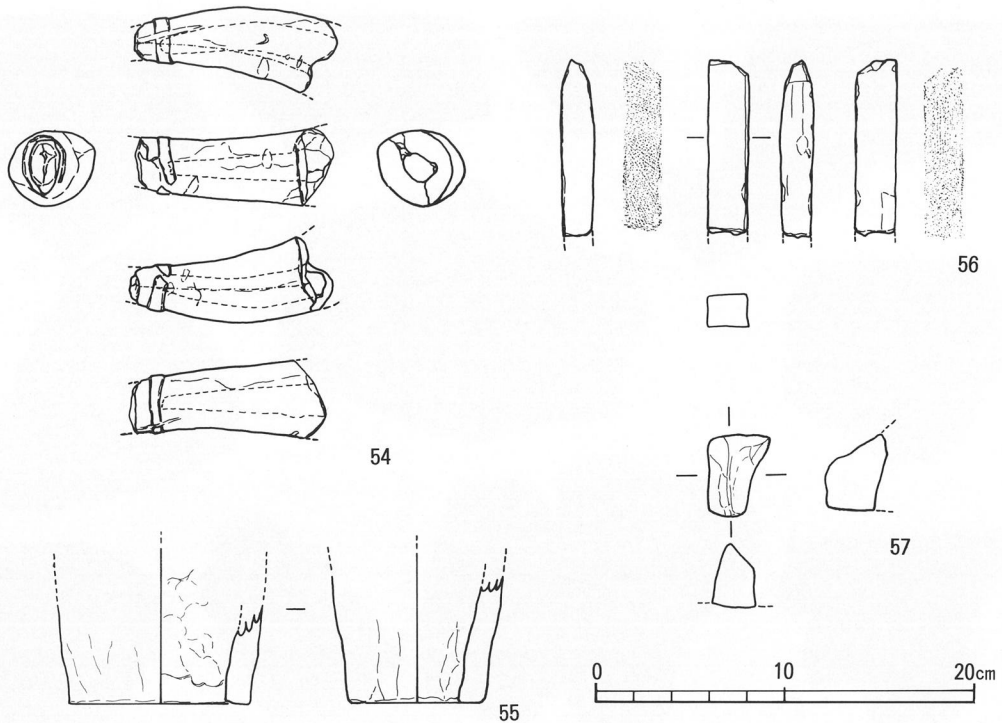


図8 高山2号墳出土遺物5

が、55とさまざまな特徴が一致し、動物形埴輪の一部とも考えられよう。

#### (4)小結

今回出土した埴輪の法量や調整技法等の傾向は、第1次調査で出土した資料と大差はなく、線刻も同じものがあった。また、人物埴輪・動物埴輪の存在も明らかになり、高山2号墳の埴輪はかなり具体的に把握することができるようになった。

高山2号墳は2度の調査により、現状よりはるかに規模の大きな古墳であることが判明した。しかしながら、南側の道路部分については周濠の範囲は不明であり、高山3号墳との遺構上の関係は確認できていない。

隣接する高山3号墳は、採集されている須恵器樽形甗からTK208並行期の築造と考えられるが、埴輪の共通性などから高山2号墳はTK216～TK208並行期の築造と考えられ、中良塚古墳とほぼ同時期かやや遅れる時期であろう。よって、今回出土した人物埴輪は人物埴輪出現期のものと考えられる。同時期の人物埴輪は馬見丘陵の古墳では北葛城郡広陵町の寺戸鳥掛遺跡で出土しており、人物埴輪の出現を考える上で重要な資料である。また、動物形埴輪が相伴していることも非常に興味深い。

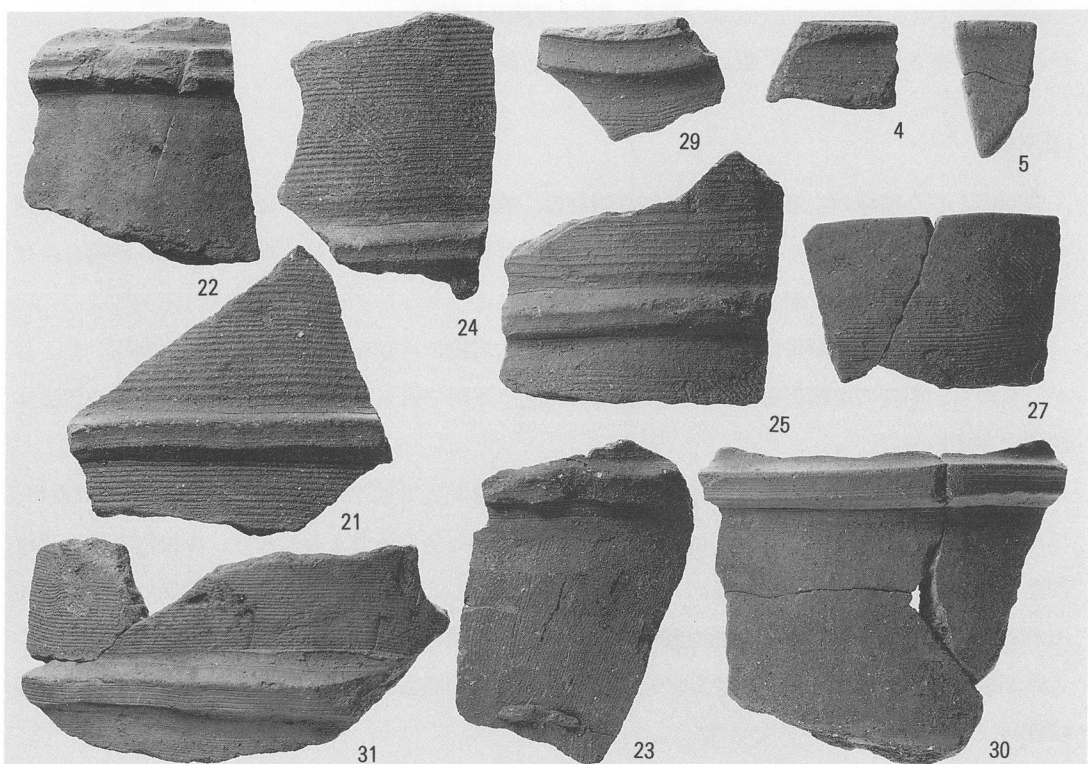
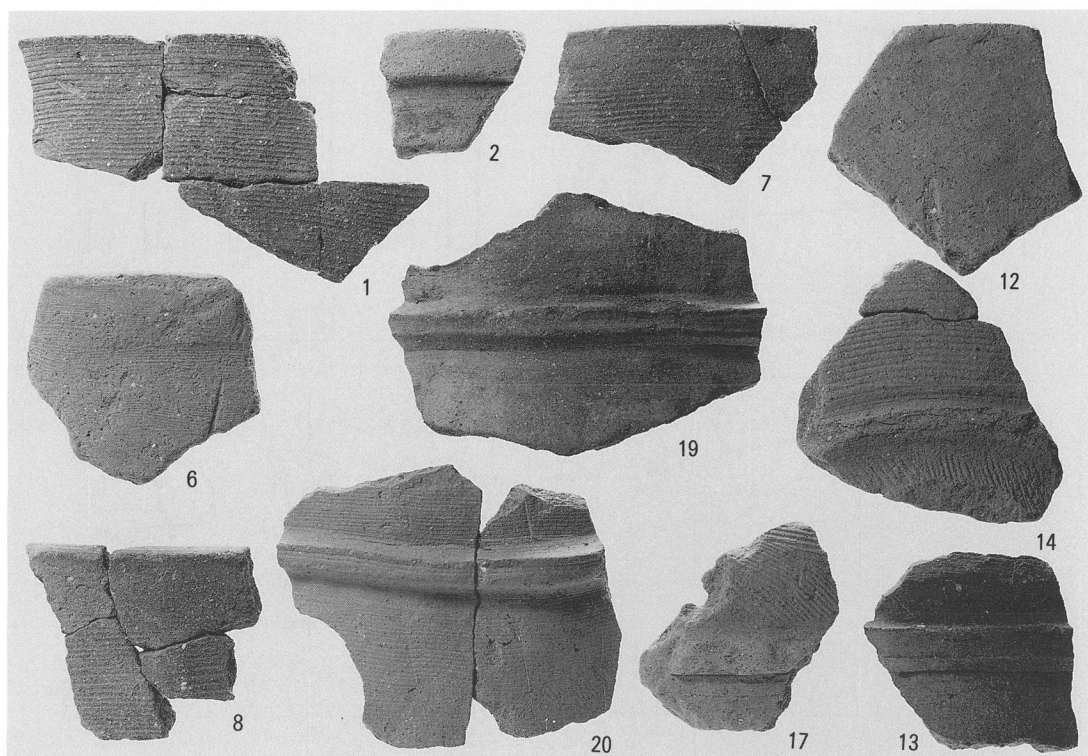


写真7 高山2号墳出土遺物3

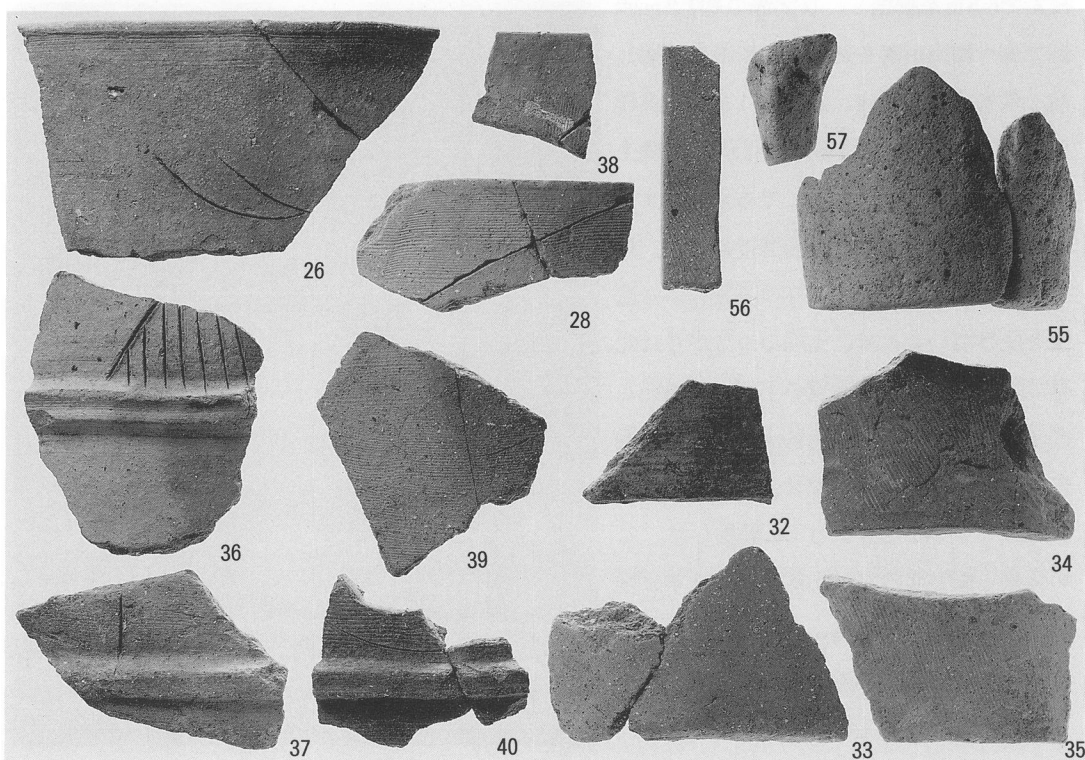
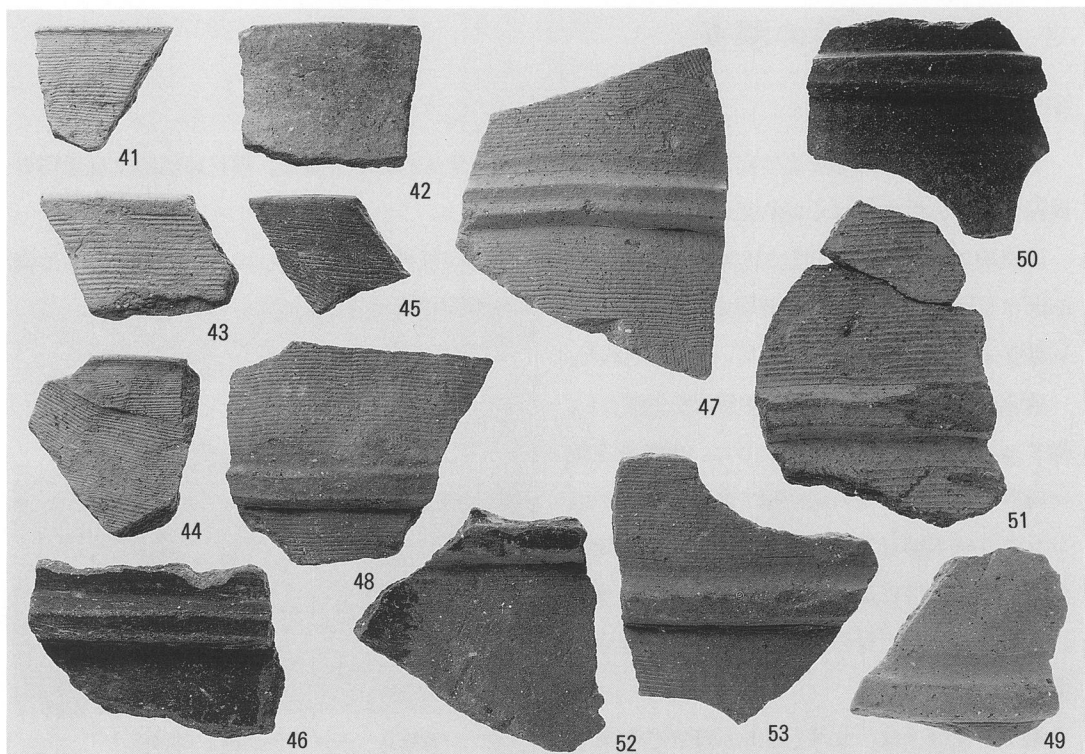


写真8 高山2号墳出土遺物4

### 3. 中良塚古墳の調査

#### (1)遺構

中良塚古墳は前方部を北に向けた前方後円墳で、墳丘全長約88mを測る。墳丘の周囲には盾形の周濠が巡り、最大幅はくびれ部で約20mである。

調査前には、昭和62年度の調査結果から外堤が存在する可能性は低いと思われ、また、周濠の外側法面はU字溝の敷設により破壊され、周濠は既に拡張されて現状を留めていないと予想された。

調査は史跡指定地より西側の確認を主眼とし、幅2m程度のトレンチ調査とした。史跡指定地の境界は現状の周濠の法面裾である。このため、コンクリート製U字溝を挟んで、現状の周濠に直角になるように東西方向に2本のトレンチを設定し、この法面裾の史跡指定地との境界まで掘削を行った。



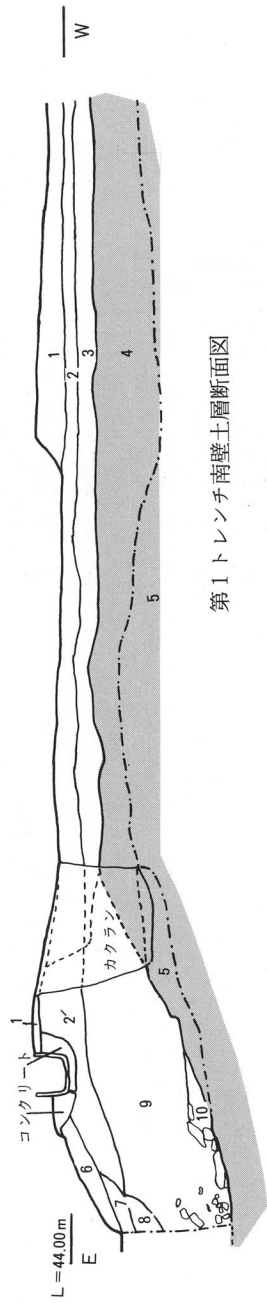
写真9 トレンチと墳丘（西から）

第1トレンチは、まず、2.5m幅でU字溝を挟んで6.5mを掘削し、U字溝の約1.2m西側で東へ地山が落ち込んでいるのを確認した。基本的な層位は、盛土（1層）、耕作土（2層）、床土（3層）、攪乱・堆積土（9層）、地山（4・5層）である。図9に示した土層はトレンチの南壁であるが、U字溝の西側は化成工場の柱の基礎により攪乱を受けていたため、土層のつながりは北壁での観察の結果と前後の土層より復元し図示した。4層の明黄色粘土は盛土の可能性も考えられ、その状況を確認するため1m幅のトレンチを西に41.5m延長した。この4層と同じような粘土層はほぼ水平に堆積しているが、U字溝より約10m西の地点から粘土層内には埴輪の碎片が含まれており、攪乱を受けた土層であることが窺える。しかし、化成工場の廃油が浸透していたた

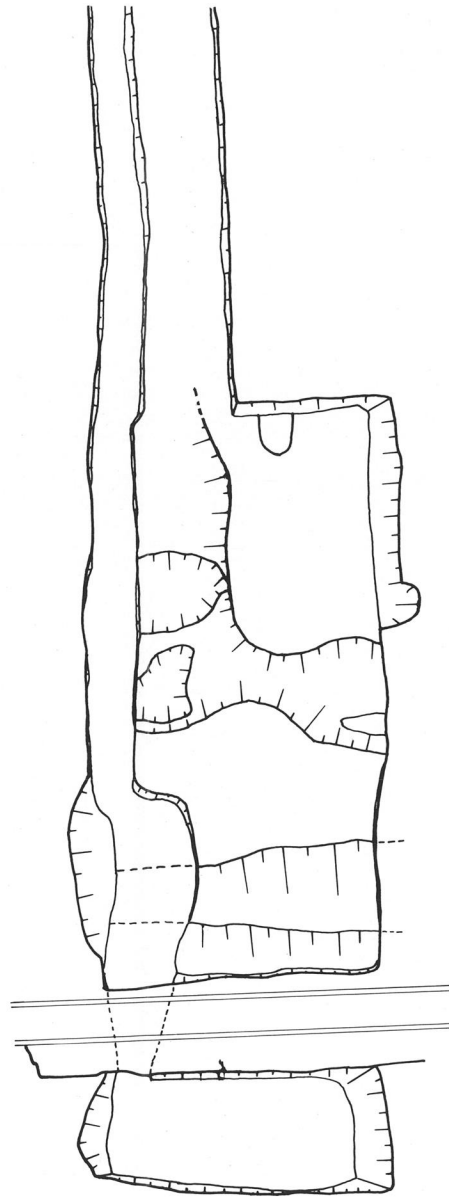


写真10 トレンチ全景・手前が第1トレンチ（南から）





第1トレンチ南壁土層断面図



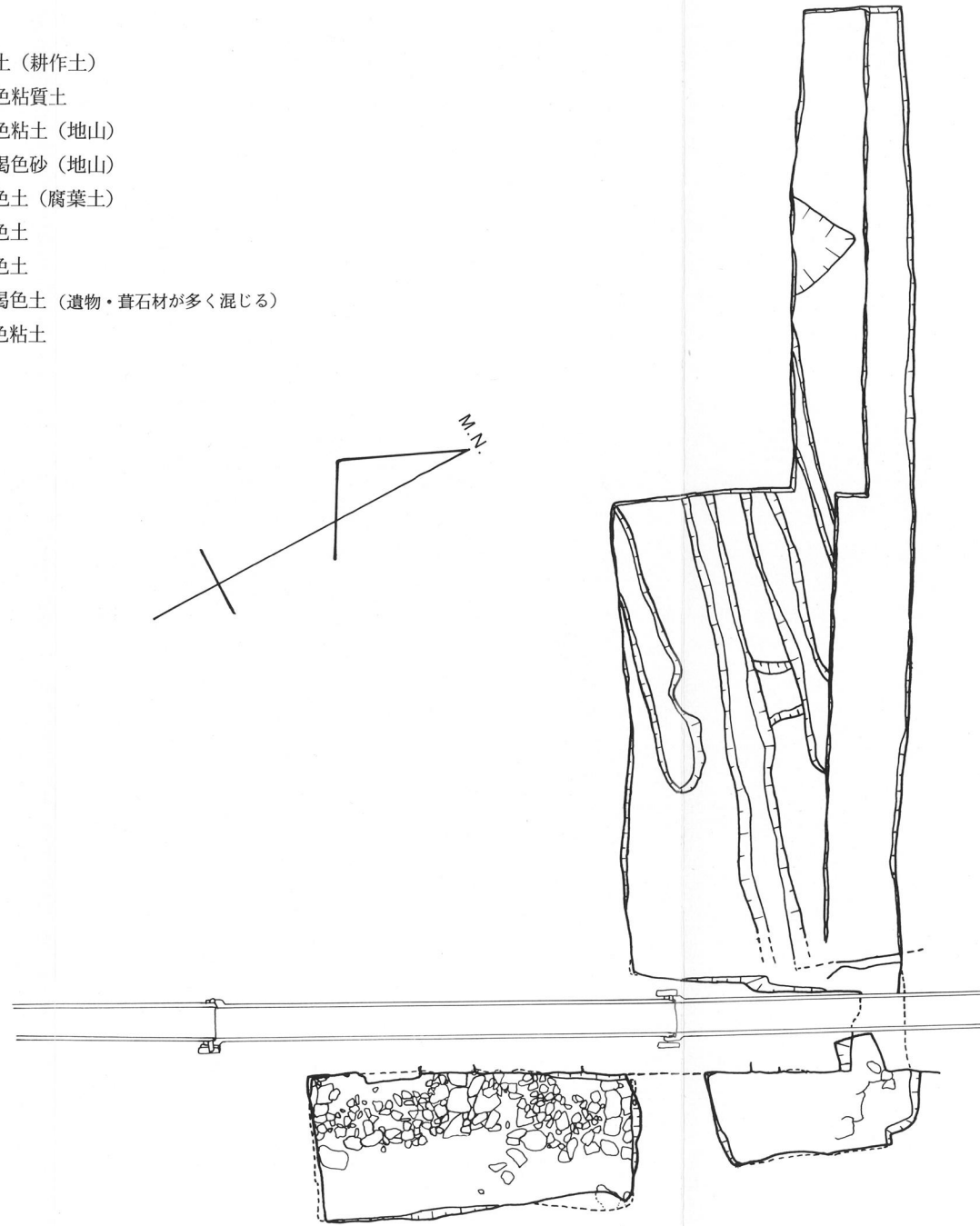
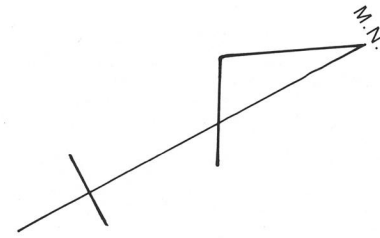
第1トレンチ

- 1 盛土
- 2 黒色土（耕作土）
- 3 青灰色粘質土
- 4 明黄色粘土（地山）
- 5 暗赤褐色砂（地山）
- 6 暗茶色土（腐葉土）
- 7 暗褐色土
- 8 暗灰色土
- 9 暗黄褐色土（遺物・葺石材が多く混じる）
- 10 灰白色粘土

外堤

U字溝

周濠



第2トレンチ拡張区

第2トレンチ

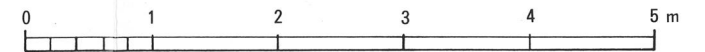
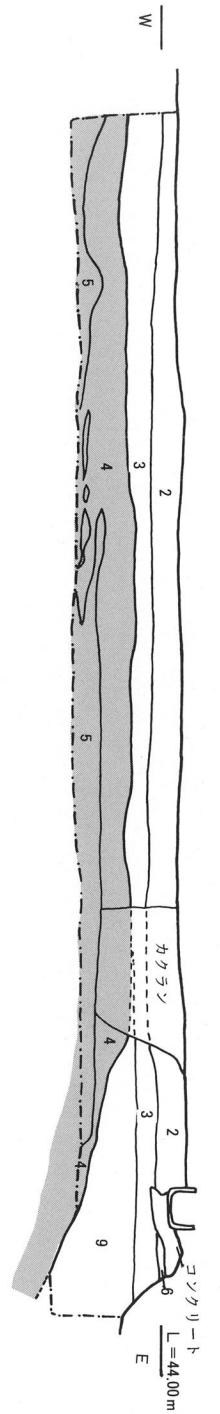


図9 中良塚古墳 トレンチ平面図及び土層断面図

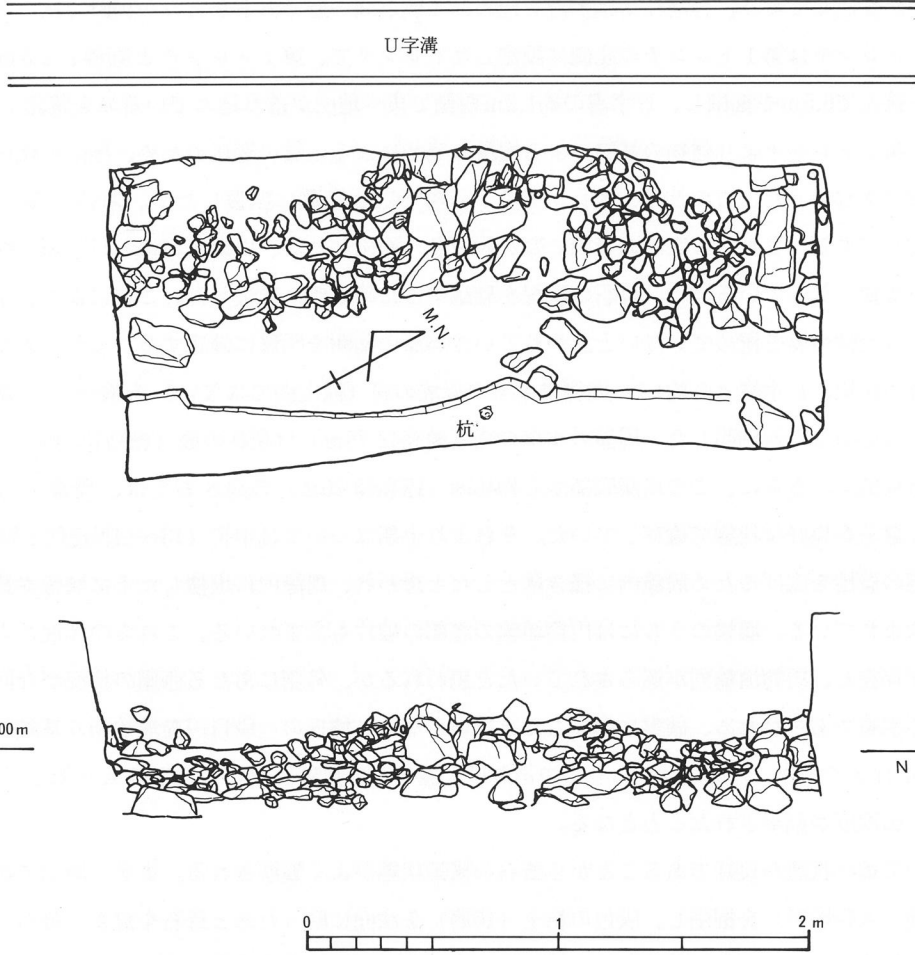


図10 第2トレンチ拡張区 葺石平面図及び立面図



写真11 第2トレンチ拡張区葺石検出状況

め、土が変色しており、分層作業は困難を極め、4層と同一層であるかどうか判断できなかった。

第2トレンチは第1トレンチの北側に設定したトレンチで、第1トレンチと同様、2.5m幅でU字溝を挟んで6.5mを掘削し、U字溝の約1.2m西側で東へ地山が落ち込んでいるのを確認した。しかし、第1トレンチより建物の基礎による攪乱と廃油による土質の変化のため、地山の状況は明確に確認できなかった。このため、トレンチを1m幅で4.2m西側に拡張したが、状況は第1トレンチと同じである。また、U字溝の東側で葺石材を多く検出したが、史跡指定地とU字溝の間隔がこの部分で狭くなっているため、葺石の状況を確認するため南側に拡張した。これにより、すでに開墾により当初の姿を留めていないと思われていた周濠の範囲を明確に確認することができた。

調査の結果、U字溝より約1.2m西側で本来の周濠の肩（最上面ではない）を検出し、周濠は現状よりも広いことが判明した。周濠の本来の底（標高42.75m）は現状の底（標高43.70m）よりも約1m程低く、さらに、この周濠底部から約40cm（標高43.20m）の高さまでは、周濠の内側に葺かれた葺石が良好な状態で遺存していた。それより上部については中世（13～14世紀代と思われる）に西側の農地を広げるため周濠内に掻き落とししたと思われる、周濠内に堆積した土に埴輪や葺石材が多く含まれている。埴輪のうちには円筒埴輪の底部の破片も含まれている。これらの状況から本来は外堤が存在し、円筒埴輪列が巡らされていたと思われるが、外側にあたる西側の状況が今回の調査では不明瞭であったため、確実に存在したとはいえない。墳丘の一段目円筒埴輪列の基底部分の標高は44.41mであり、外堤が存在したのであれば上面はこの数値に近いものと考えられよう。よって、60cm程度が削平されたこととなる。

葺石の遺存状態が良好であることから葺石の構築状態がよく観察される。まず、地山である褐色の砂層（大阪層群）を掘削し、灰色の粘土（10層）を法面に貼ったあと葺石を葺き、葺石の目地にさらに粘土を詰めている。葺石は6～30cm大の黒雲母花崗岩・片麻状黒雲母花崗岩を約1.1m間隔で縦に積み上げたあと、1～15cm大のチャート・砂岩をその区画内に詰め込むという工法を用いている。縦方向に等間隔に葺かれた大きな石は一般に作業単位を示すものとして理解されている。また、使用されている石材の岩相・礫形・礫径の特徴から、石材は古墳北方の大和川川原で採取されたものと考えられる。この石材についての詳細は奥田氏の分析を参照されたい。

## (2)遺物

今回の調査で出土した遺物は埴輪、須恵器、土師器である。埴輪は円筒埴輪の他に朝顔形埴輪が出土している。須恵器、土師器は飛鳥時代以降のものであり、中良塚古墳に伴うものではない。

### 円筒埴輪（図11・12：1～7、12～16）

1は口縁部。図上復元で口径は25.8cmを測る。外面調整はB種ヨコハケで、内面調整はナデで、口縁端部のみヨコハケを施している。

2・3、12～16は胴部。いずれも外面はヨコハケ調整を施し、内面はタテナデにより調整してい

る。15の外面調整はB種ヨコハケである。

尚、14には直線的な線刻がある。この線刻は高山2号墳の埴輪の線刻に較べ、あまり強く刻まれていないが、ハケを切っており、線刻と考えられる。部位は凸帯の下部になるので、口縁部ではなく、それより下位の部分である。

4～7は基底部。復元径は4が27.0cm、5が25.0cm、6が29.0cm、7が29.2cmである。外面調整は4・5・7がタテハケで6はヨコハケである。内面調整は4・7がナデで、5はヨコハケ、6はタテハケである。ハケの単位は、7が9本/1.5cmで最も細かく、4は6本/1.7cm、5は7本/2.0cm、6が6本/2.0cmで、7以外は目の粗いハケを用いている。

7は僅かに凸帯の一部が残存しており、最下段の凸帯の高さは基底から9.5cmである。また、底面には植物の茎の痕跡が観察される。

**朝顔形埴輪 (図11: 8～11)**

8は頸部。復元径は凸帯部分で21.4cmである。凸帯より下部は外面をヨコハケ調整し、内面はナデ調整を施している。凸帯はナデ調整。凸帯より上部は外面はタテハケ、内面はナメハケのあとヨコハケを施している。胎土や焼成、ハケの原体が7とよく似ており、また、どちらも第1トレンチの出土であり、同一個体の可能性もある。

9・10は口縁部。9は口径44.2cm、10は口径47.9cmを測る。9の外表面調整はタテハケで口縁端部はハケのあとナデている。内面はナデ調整。内外面に赤色顔料を塗布しているようである。10は外面をタテハケ、内面をヨコハケにより調整し、口縁端部をナデている。9は口縁端部がなめらかに外反して終わるが、10は口縁端部を水平方向につまみだし、端面を強くナデている。

11は肩部。凸帯部分の復元径は33.6cmを測る。外面調整は磨滅が著しく明瞭ではないが、ヨコハケのあとナデを施している。内面調整はナデである。

尚、中良塚古墳の埴輪については、本書では調査により出土したものの報告に留めたが、採集資料や寄贈資料に興味深い資料があるので、今後何らかのかたちで紹介する予定である。

番号	外 面 調 整	内 面 調 整	種類	部 位	スカシ	質	備 考
1	B種ヨコハケ	ヨコハケ → ナメナデ	円筒	口縁部		硬質	
2	ヨコハケ → 凸帯	タテナデ	円筒	胴部		硬質	
3	ヨコハケ → 凸帯	タテナデ	円筒	胴部		硬質	
4	タテハケ	タテナデ	円筒	底部		須恵質	
5	ナメハケ	ヨコハケ	円筒	底部		硬質	
6	ヨコハケ	タテハケ	円筒	底部		須恵質	
7	タテハケ	ナメナデ	円筒	底部		硬質	
8	(下部) ヨコハケ (上部) タテハケ	(下部) ヌビナデ (上部) ナメハケ	朝顔	頸部		硬質	
9	タテハケ → ナデ	ヨコナデ	朝顔	口縁部		硬質	赤色顔料塗布
10	タテハケ → ヨコナデ	ヨコナデ	朝顔	口縁部		軟質	
11	ヨコナデ → 凸帯	ヨコナデ	朝顔	肩部		硬質	
12	ヨコナデ → 凸帯	タテナデ	円筒	胴部		軟質	
13	ヨコハケ → 凸帯	タテナデ	円筒	胴部		硬質	
14	ヨコハケ → 凸帯	タテナデ	円筒	胴部		硬質	線刻
15	B種ヨコハケ → 凸帯	タテナデ	円筒	胴部		硬質	
16	ヨコハケ → ヨコナデ → 凸帯	ヌビナデ	円筒	胴部		軟質	

表2 中良塚古墳出土埴輪観察表

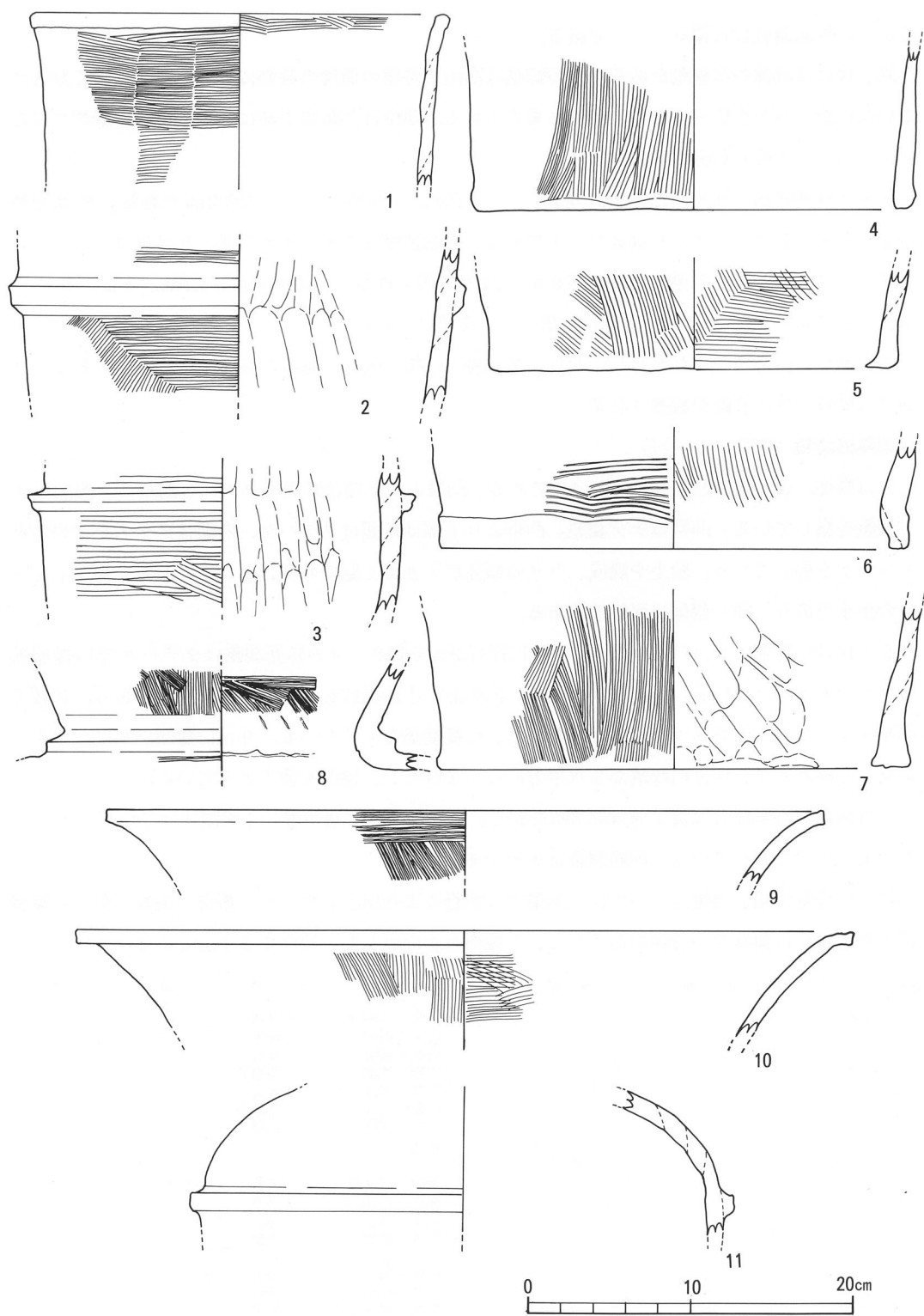


图11 中良塚古墳出土遺物 1

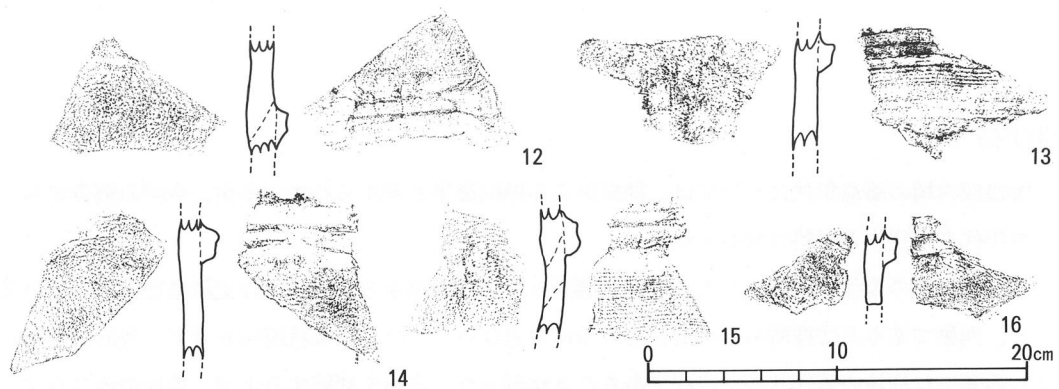


图12 中良塚古墳出土遺物 2

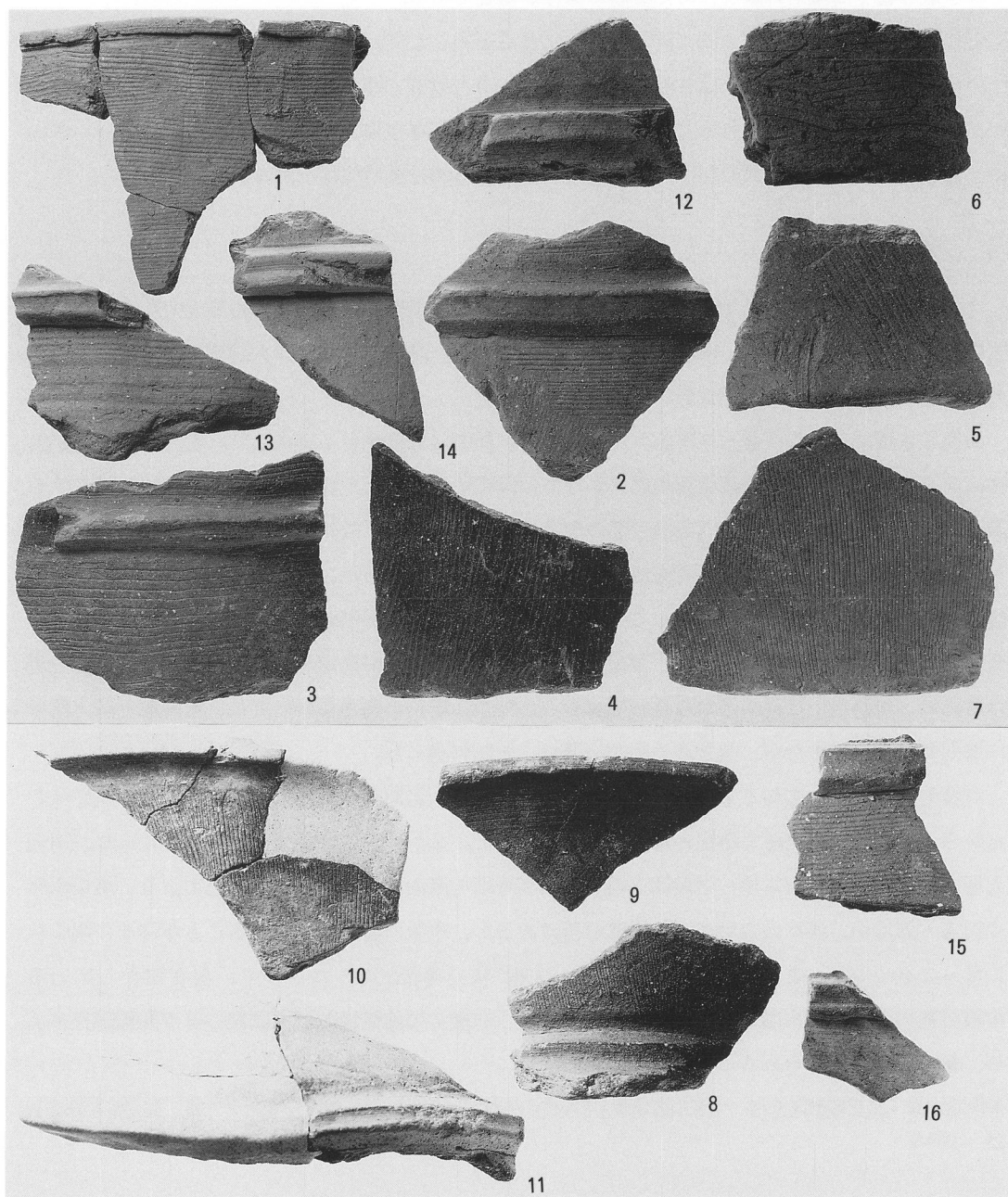


写真12 中良塚古墳出土遺物

### (3)小結

中良塚古墳の築造年代については、従来から5世紀後半と考えられているが、今回の調査でも、この年代を否定する材料はなかった。

中良塚古墳の現状は史跡としての保存状態をみると、周濠部分については史跡指定後の改変が著しく、西側で辛うじて往時の姿を留めているにすぎない。このような状況のもとで、今回の調査により西側では周濠の遺存状態が良好であることが判った。古墳を理解する上で、墳丘のみならず、それを取り巻く周濠や外堤を含めた景観の保存が重要である。

また、今回の調査で確認された周濠の内側に葦石を施した例は現在のところさほど多く確認されていない。大阪府羽曳野市と藤井寺市に分布する古市古墳群で岡古墳や野中古墳など数基の調査例がある他、奈良県内ではこれまでに北葛城郡広陵町三吉石塚古墳などが知られるのみである。さらに、葦石材の大きさや種類を明確に意識して葺いている例は極めて稀である。

## 4. 結語

今回の調査は、高山2号墳と中良塚古墳の史跡指定地に隣接する土地の発掘調査であり、高山2号墳と中良塚古墳の範囲の一部を確認することができた。高山2号墳では人物埴輪の出土があり、人物埴輪の出現を考える貴重な資料となった。

中良塚古墳では周濠の葦石を確認するとともに、詳細な地形測量を実施した。墳丘は2段築成で、特に前方部の西側側面から北西隅角部にかけては段築の状況がよく観察できる。全体的に前方部の遺存状況は良好であるが、後円部は上段のテラス面以外は著しく改変されており、特に、東側くびれ部付近の削平が顕著である。周濠は西側で良好に遺存しているが、他の部分は周辺の道路などに痕跡を留めているのみで既に埋没している。この測量図から1959年の測量の計測値<sup>\*</sup>については若干の変更があると思われる。しかし、発掘調査による正確な範囲が確定されていないので、混乱を避けるため、現時点では従来どおりとしておく。ただし、墳丘の高さについては、後円部と前方部はほぼ同じとされてきたが、前方部が約40cm低いことが判明した。

河合町の北東部に広がる平地に分布する8基の古墳は、短期間に築造され、遺存状態が良好なことから、一括して国史跡に指定されて保護されてきた。しかし、これまでの発掘調査により、川合大塚山古墳・川合城山古墳・中良塚古墳・高山2号墳・高山3号墳は後世の開発により、墳丘本体や周濠・外堤が、各々の古墳により程度の差はあるが、本来の姿を失っていることが徐々に明らかになってきている。また、この周辺ではかつて“塚”状の地形があったらしく、現在遺存している古墳の他にも多くの古墳があったことが推測され、今後この地域における開発に伴う発掘調査により、新たな資料が得られることであろう。

※伊達宗泰「北葛城郡河合村 大塚山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第十二輯』奈良県教育委員会 1959年

## 中良塚古墳外堤の葺石

奥田 尚

中良塚古墳西側外堤周濠側に敷かれている葺石の礫種と礫形、礫径を裸眼で観察した。使用されている石種は黒雲母花崗岩、砂岩、チャート、片麻状黒雲母花崗岩である。礫種構成としてはチャートが約6割を占め、片麻状黒雲母花崗岩が3割、黒雲母花崗岩が約1割を占める。礫径としては片麻状黒雲母花崗岩に比較的大きなものが多い、チャートは6～10cm大のものが多い。礫形としては亜角礫が約6割、角礫が約2割5分を占め、円礫が認められない。また、作業単位が認められるが、作業単位間での礫種、礫形、礫径についての差は認められない。

礫種の特徴について述べる。

**黒雲母花崗岩**：色は灰白色であり、風化している礫が多い。石英と長石と黒雲母が噛み合っている。石英は灰白色、粒径が1～1.5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が1～1.5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm、量ごく僅かである。

**砂岩**：色は暗灰色である。細砂粒からなる。

**チャート**：色は灰白色、灰色、黒色である。基質はガラス質である。

**片麻状黒雲母花崗岩**：色は茶褐色で縞状をなす。風化してこわれやすい石である。黒色部には黒雲母が集まり、白色部には長石が集まっている。石英と長石と黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が中である。長石は無色～灰白色透明、粒径が1～1.5mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm、量が多い。

古墳が築造されている付近の地山は、礫を殆ど含まない大阪層群の粘土層や砂層からなり、古墳に使用されているような礫を地山から得ることができない。礫が得られる地としては古墳北方の大和川川原があげられる。風化した黒雲母花崗岩や片麻状黒雲母花崗岩、チャート礫は岩相、礫形、礫径が古墳北方の大和川川原に見られる礫と似ている。しかし、チャートの量は比較的に少ない。葺石として採石した時、意図的にチャートを多く採石したと推定される。

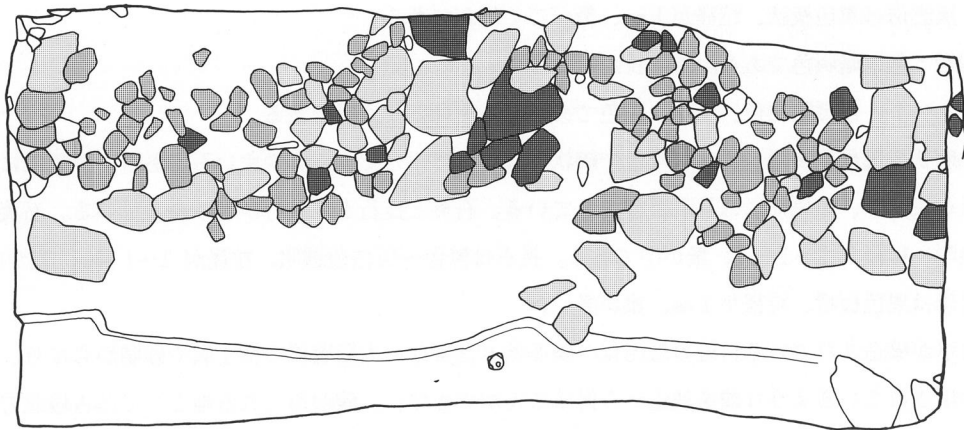
表3 葺石の礫種と礫径

礫 種	礫 径 (cm)						合 計
	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	
黒雲母花崗岩		10	6	2	1	1	20
砂岩		2					2
チャート	5	70	14	1			90
片麻状黒雲母花崗岩		10	15	8	5	4	42
合計	5	92	35	11	6	5	154



表4 葺石の礫種と礫形

礫種	礫形				合計
	角	亜角	亜円	円	
黒雲母花崗岩	9	9	2		20
砂岩		2			2
チャート	11	63	16		90
片麻状黒雲母花崗岩	15	17	10		42
合計	35	91	28		154



凡例

黒雲母花崗岩
  砂岩
  チャート
  片麻状黒雲母花崗岩
  未調査

図13 中良塚古墳周濠葺石の石種

# 河合町文化財調査報告

- |     |  |       |
|-----|--|-------|
| 第1集 | 佐味田宝塚古墳 <sup>きみだ</sup>                               | 1986年 |
| 第2集 | 史跡乙女山古墳 付高山2号墳                                       | 1988年 |
| 第3集 | 長林寺  | 1990年 |
| 第4集 | 河合町遺跡詳細分布調査報告  | 1990年 |
| 第5集 | 高山3号墳  | 1992年 |
| 第6集 | 1991年度埋蔵文化財調査報告（市場垣内遺跡・史跡城山古墳） <sup>いちばがいと</sup>     | 1992年 |
| 第7集 | 穴闇 <sup>なぐら</sup> ～大型動物化石産出地内の発掘調査報告～                | 1992年 |
| 第8集 | 1992年度埋蔵文化財調査報告（長楽遺跡・フジ山古墳・川合大塚山古墳） <sup>ちやうらく</sup> | 1993年 |
| 第9集 | 高山2号墳Ⅱ・中良塚古墳 <sup>なからづか</sup> （本書）                   | 1994年 |

---

## 高山2号墳Ⅱ・中良塚古墳 —河合町文化財調査報告 第9集—

1994年3月31日

編集 河合町教育委員会  
発行 奈良県北葛城郡河合町大字池部3  
TEL 07455-7-0200  
印刷 明新印刷株式会社

---

